

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | ガストン・ルルーとドレフュス事件 : 『マタン』 Le Matin 紙上のドレフュス事件関連記事から |
| Author(s) | 宮川, 朗子 |
| Citation | 広島大学フランス文学研究 , 40 : 26 - 40 |
| Issue Date | 2021-12-25 |
| DOI | |
| Self DOI | 10.15027/52035 |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052035 |
| Right | |
| Relation | |



ガストン・ルルーとドレフュス事件

『マタン』 *Le Matin*¹紙上のドレフュス事件関連記事から

宮川 朗子

はじめに

ガストン・ルルーのポール・デルレードへの関心やドレフュス事件を報じる『マタン』紙の全般的な論調などから判断するなら、この作家が発表した一連のドレフュス事件の記事における、ほぼ一貫したドレフュス無罪の支持とドレフュス派に好意的な見解は、一見、意外に思われるかもしれない。ルルーの政治的傾向を概観した後、アルフェは、「ルルーは共和主義的民主主義の擁護者である。Leroux est un défenseur de la démocratie républicaine²」と判断しているが、この事件についての一連の記事を読むとき、ルルーがドレフュスを擁護した他の要因も見えてくる。

そこで拙論では、ルルーの署名が入った『マタン』紙上のドレフュス事件関連記事を追いながら、この作家がドレフュスを支持した要因を導き出すことを試みたい。

I. ドレフュス事件と『マタン』紙

ルルーとドレフュス事件の関係を考察する前に、この作家が専属のジャーナリストとして記事を発表していた『マタン』紙とドレフュス事件との関係を整理しておく。まずは『新聞文明』*Civilisation du journal*(2011)所収の「定期刊行物の歴史的類型論 日刊紙」の記述を要約する³。『マタン』紙は、1884年2月、アメリカ人サム・チェンバレンによって創刊され、独自の通信網(« fils spéciaux »⁴)を使ってアメリカ流の短い情報と広告を数多く掲載していた。当初は連載小説も載せていなかったようだ。しかし1895年、アンリ・ポワダズとモーリス・ビュノ＝ヴァリヤが引き継ぐと、編集方針は大きく変更される。アメリカ流の情報提供方法は維持しながらも、イラスト等を用いた人目を引くレイアウトを組み、万人の利益のためという大義名分のもとに派手

¹ 拙論において、この新聞からの引用は、発行年月日とページ番号のみ記す。

² Alfu, *Gaston Leroux Parcours d'une œuvre*, Encrage, 1996, p. 43.

³ Dominique Kalifa, Marie-Ève Thérénty, Alain Vaillant, « Typologie historique des périodiques Le quotidien », dans *La Civilisation du journal*, Nouveau Monde éditions, 2011, pp. 291-292.

⁴ 1884年5月15日から、1面のタイトル下に« Seul journal français recevant par fils spéciaux les dernières nouvelles du monde entier »の文句が入る。

なプレス・キャンペーンを張り、世論に油を注ぐような論調で成功し、ベル・エポック期には、フランスの主要な日刊紙となる。

ルルーが入社した頃には、すでに大新聞と見做されており、政治の大きな動きや大事件などには、一定の慎重さも備えていたようだ。それは、1894年10月15日のドレフュス逮捕を報じたときにも認められるが、このニュースに対して即座には反応せず、12月の裁判中も、ドレフュスに対して同情的なアルチュール・ランクの記事を掲載している（参照：20.12.1894, p. 1）。しかしながら、有罪判決が下されると、反ドレフュス的な論調が徐々に増幅し始める。判決の翌日の1面で、J.コルネリーは、それでも、ドレフュスの罪をユダヤ人の罪とすることは、不当で非合理的だろうと判断するも、非公開裁判も有罪判決も誤っていないとした（参照：23.12.1894, pp. 1-2）。一方、同日1-2面の無署名の記事では、この判決によって、「ユダヤ教徒たちは、このドレフュスと絶縁するだろう。われわれの軍隊や彼が卒業した理工科学校が、聖なる制服を着た裏切り者と絶縁したように。Les israélites [*sic*] répudient ce Dreyfus, comme notre armée, comme l'École polytechnique, d'où il est sorti, répudient le traître qui portait un uniforme sacré」(23.12.1894, p. 1)と、この事件をユダヤ人問題と切り離すものの、ドレフュスを憎々しく反抗的な者として描く。

On aperçoit le bout de la moustache, le lorgnon et, derrière, deux yeux brillants d'un extraordinaire éclat.

Ah! ce n'est pas là le regard d'une victime protestant de son innocence. Dans ce rapide coup d'œil on ne sent que la colère et le défi. (23.12.1894, p. 1)

異常な目の光は、無実を訴える人間のものではなく、怒りと反逆が感じられるとしている。また、これに続いて、ドレフュスの妻の実家であるアダマール家に集まった被告の家族の悲嘆が紹介されているが、そこには、この一家に同情的な論調にそぐわない「裏切り者の家族」La famille de traître という小見出しがつけられている。

反ドレフュス色は、1896年11月10日、ドレフュス有罪の根拠となった「明細書」の複製をもとに論じた「証拠」La Preuve と題する記事で決定的となる。

À l'aide de manœuvres savantes et ténébreuses, en donnant des allures de réquisitoires à d'habiles plaidoyers, en faisant appel aux sentiments de justice et de générosité qui hantent tous les cœurs dans notre pays, on s'attèle à cette œuvre surhumaine : la révision du procès du traître Dreyfus. Sous le prétexte fallacieux que contre lui on aurait

restauré nous ne savons quelles pratiques inquisitoriales, on voudrait le faire revenir en France pour y comparaître devant de nouveaux juges.

Comédie, tout cela. Dreyfus est bien coupable du plus grand de tous les crimes.

(10.11.1896, p. 1)

この頃は、ドレフュス派が再審にむけての運動を活発化させつつあったが、その動きを阻止するかのようになり、無署名⁵のこの記事において、「明細書」の筆跡を理由に、ドレフュスの有罪はゆるぎないものと断定している。

皮肉なことに、それまで再三懇願してもこの明細書の閲覧が不可能だったアルフレッド・ドレフュスの兄マチューにとって、この記事が思いがけない幸運な証拠となるのは⁶、後日よく知られる通りである。この記事の発表の約 3 か月前、ピカール大佐は、明細書の筆跡はエステラジーのものとするに確信していたが、この『マタン』紙の記事によって、ドレフュス無罪の可能性は、ますます信憑性をもって世に伝えられることとなる。

『マタン』紙が一徹な反ドレフュス主義であったのなら、この記事は大失態だっただろうが、政治的中立を標榜するこの新聞にとって、この記事は事件に一つの事実を示したに過ぎないということなのだろうか——この一件について特に釈明することもなく、その後もドレフュス事件を報じ、相変わらず中立を謳いながらも、反ドレフュスの論調をさほど変えない。破棄院が、ドレフュス有罪の判決を破棄した 1899 年 6 月 3 日、『マタン』紙は、一面に「エステラジー、明細書の作成を告白」*Esterhazy avoue qu'il a fait le bordereau* の大きな見出しを掲げ、エステラジーと『マタン』紙の特派員ポール・リボン（セルジュ・バッセのペンネーム⁷）との独占インタビュー記事を

⁵ アデリーヌ・ウロナが『マタン』紙の第 1 号に掲載した編集方針「読者へ」*Au lecteur* に注目させながら指摘したように、『マタン』紙の創始者であるサム・チェンバレンや彼から引き継いだ者たちの狙いは、この新聞に特定の政治的意見をもたせないことであった。上述の「読者へ」に「マタン」*Le Matin* という集合名詞を署名としたことや、1 面の論説をあらゆる政治的傾向を代表する論客で構成したことは、政治的意見を不在にさせる方法であったという。(Cf. Adeline Wrona, « Écrire pour informer », dans *La Civilisation du journal, op. cit.*, pp. 732-733) この見解に拠るなら、政治的意見を鮮明に出したこの記事に署名を入れないことも、特定の意見ではなく、より一般的な意見として提示するための方法であったとも推測されよう。

⁶ Cf. Joseph Reinach, *Histoire de l'Affaire Dreyfus*, tome I, Laffont : Bouquin, p. 564 note 1

⁷ フィリップ・オリオルは、バッセのエステラジー無罪の確信が、見せかけだった可能性を仄めかしている。Cf. Philippe Oriol, « Serge Basset », dans *Dictionnaire de l'Affaire Dreyfus* : <https://dicoaffairendreyfus.com/index.php/2020/04/26/serge-basset/>

掲載する。しかし、その告白は、スパイ行為を働いたという罪の告白ではなく、「サンデール大佐にそそのかされて書いたのだ」*Je l'ai fait sur l'invitation du colonel Sanderr* (3.6.1899, p. 1)という、かつての上司に対する恨み言であった。

II. ガストン・ルルー：弁護士からジャーナリストへ

このような『マタン』紙の論調を考慮するなら、この日刊紙におけるルルーの立場が特異でありながら、必要であったことも想像に難くない。実際、ルルーのドレフュス事件に対する見方に、この新聞社からの影響は薄く、むしろ入社前のキャリアに負うところが大きいように思われる。そこで、ドレフュス事件を報じるまでのルルーの経歴について、少し触れておく。

アルフュの研究とガストン・ルルーの権利継承人が開設したサイト上の「ガストン・ルルーの経歴」*Biographie de Gaston Leroux* によるなら⁸、ガストン・ルルーは、1868年にパリで生まれるが、両親はノルマンディー地方にゆかりのある公共事業の請負業者で、ウ城(*Château d'Eu*)の修復に従事していた。その縁ゆえか、ガストンを1880年、セーヌ=マリティム県のウ中学校(*Collège d'Eu*)に寄宿生として入学させる。間もなく両親を相次いで失うという不幸に見舞われ、ガストンは、若くして幼い妹や弟を支える家庭の大黒柱とならざるをえなくなる。そして、1886年にバカロレアに合格すると、パリ大学で法学を修め、1890年には弁護士の道を歩み始める。とはいえ、文学への関心は強く、学生時代から学業のかたわら、雑誌や新聞に、記事や小説を発表している。

転機となったのは1893年、アナキストによる一連のテロ事件の裁判傍聴記事を、『パリ』*Paris*をはじめとする新聞に発表したことである。ルルーの記事に注目した『マタン』紙からの誘いを受けて、1894年初頭、専属ジャーナリストとなり、同紙においても、アナキストのテロ事件の裁判傍聴記を発表するが、同時に、弁護士の仕事はこの頃に辞しているようだ。その後、ジャーナリストとしてのキャリアを着実に積み上げてゆくが、その名を上げる契機となったのは、ウ中学時代に深めた親交のおかげで、1895年、オルレアン公フィリップの独占インタビューに成功したことである(参照：14.3.1895, p. 1)。さらに、1897年には、共和国大統領フェリックス・フォールのロシア訪問に付き添う6人のジャーナリストのうちの1人に選ばれている。

『マタン』紙はルルーの記事のどのような点を評価したのだろうか。この新聞社入社以前にルルーが発表したテロ事件の裁判傍聴記から窺えるのは、裁判記録からの抜

⁸ Alfu, *op. cit.*, pp. 10-14. « *Biographie de Gaston Leroux* », site officiel des ayants-droits de Gaston Leroux : <https://www.gaston-leroux.com/biographie/>

粹を多用し、自身の評価を鮮明には出さない書き方である。『マタン』紙が注目したアナキストによるテロ事件の裁判傍聴記事についても、やはり、裁判長の尋問と被告ヴァイヤンの返答といった、裁判記録を中心に構成されている。また、被告の様子を「少し青ざめた顔色で、決然とした視線を投げかけ、ほとんど横柄な態度 *la face légèrement blême, le regard décidé, l'allure presque arrogante*⁹」と描き、裁判長から質問される度に、それを遮る反抗的な言動を取り上げるなど、被告に対して批判的な見解を見せながらも¹⁰、最後に弁護士ラボリの「ここにいるのは怪物でも、国務大臣が主張するような下劣な殺人者でもない。ヴァイヤンは社会の犠牲者だ。社会は彼に何もしてくれなかったのだから。これら有罪とされた罪は、貧困によるものと説明がつく *Ce n'est pas là un monstre, un assassin vulgaire comme le prétend le ministère public. Vaillant est la victime de la société qui n'a rien fait pour lui. Ses dernières condamnations sont expliquées par la misère.*」という弁明と「もしヴァイヤンを死刑にするなら、彼の父親はどのように裁くつもりですか？彼を捨てたあの憲兵は *Si vous condamnez Vaillant à mort, que ferez-vous de son père, de ce gendarme qui l'a abandonné ?*¹¹」という結語を引用して、ヴァイヤンの擁護も忘れない。

さらに、そのひと月後のヴァイヤン処刑に関する記事からは、ルルーの死刑に対する嫌悪が、「その不吉な仕事を全うするために、殺人機械とともにやってきたのは死刑執行人だった *C'est le bourreau qui vient avec sa machine à tuer pour accomplir sa sinistre besogne*」という一文から始まる、淡々と仕事を進める死刑執行人一家¹²の不気味な描写から窺えるが、死刑制度に対して明確な反対意見を表明することなく¹³、この処刑が肉食日に行われたことから、「実際、斬首刑が肉食日に実行されたことは決してなかった。ウジェーヌ・シュエの小説を別とするなら。 *Jamais, en effet on n'exécute*

⁹ *Paris*, 11 janvier 1894, p. 1.

¹⁰ この見解は、後に『シェリ=ビビの最初の冒険 海に浮かぶ監獄』において、シェリ=ビビのアナキストの銀行家批判として展開されている。 Voir Gaston Leroux, *Premières aventures de Chéri-Bibi*, (1913), dans Gaston Leroux, *Chéri-Bibi*, Laffont : Bouquin, 2010, p. 68

¹¹ *Paris*, 12 janvier 1894, p. 3.

¹² 親から子へと受け継がれる死刑執行人の肖像は、後、『金の斧』*La Hache d'or* (1912)において展開される。

¹³ ルルーは、「首に賭けて *Sur une tête*」(20.6.1902)において、死刑制度に対する反対を表明しているが、その一年後の6月20日には、それとは異なる見解を發表していることから、この問題に対するルルーの見解のつかみどころのなさに、アルフェは注意を促している。(Alfu, *op. cit.*, p. 44)

les condamnés à la peine capitale durant les jours gras sinon dans les romans d'Eugène Sue¹⁴」(6.2.1894, p. 1)といった、非難に冗談を織り交ぜた書き方をする程度にとどまっている。

対立する二つの立場のどちらにも与して自分の立場を玉虫色に変化させかねないこのスタイルは、「中立」を標榜する『マタン』紙の編集長の目には、むしろうってつけであると映ったのかもしれない。

III. ネーヴ侯爵事件

1894年初頭には、『マタン』紙専属のジャーナリストとなっていたゆえ、この年の10月に公になったドレフュス事件と12月のドレフュス裁判を、ルルーは担当できたかもしれなかった。しかし、『マタン』紙上で、この年のドレフュス裁判やその翌年1月の軍位剥奪式に関する記事に、ルルーの署名は見当たらない。弁護士という経歴からか、ルルーが『マタン』で担当した記事の多くは裁判傍聴記だったため、非公開裁判と軍位公開はく奪式という儀式は、担当外だったのかもしれない。

ところで、ルルーのドレフュス事件関連記事を検証する前に注目しておきたいのは、この事件発覚の約一年後に行われたネーヴ侯爵事件の裁判に対するルルーの見解である。それは、1885年にイタリアのラ・フサレッラで発見された子どもの遺体について、その発見から9年後の1894年、ネーヴ侯爵夫人が、それは結婚前に授かった自分の子であり、夫である侯爵が殺害したと告発して世間の注目を浴びた事件の裁判である。ルルーは、この裁判の開始前に、身分を偽り、変装して監獄に潜入し、被告である侯爵との面会に成功してその様子を報じ¹⁵、裁判も傍聴したようだ。この事件には、ラ・フサレッラで見失った侯爵夫人が結婚前に儲けたイポリット・メナルド少年

¹⁴ Paris, 6 février 1894, p. 1.

¹⁵ Cf., Alfu, *op. cit.*, p. 13-14 ; Zoé Commère, *Un autre regard sur le monde. Poétique et géopolitique de l'espace dans les grands reportages et les romans de Gaston Leroux (1897-1924)*, Thèse de doctorat, Université Laval et Université Lumière Lyon 2 Lyon, France, p. 33. <https://corpus.ulaval.ca/jspui/bitstream/20.500.11794/38227/1/35861.pdf>
尚、この事件は、『黄色い部屋の謎』*Le Mystère de la chambre jaune* の冒頭でも言及され、黄色い部屋事件の謎の深さを示す役割を果たしている。Voir Gaston Leroux, *Rouletabille chez les Bohémiens*, dans *Les Aventures extraordinaires de Rouletabille reporter*, tome 1, édition établie par Francis Lacassin, Laffont : Bouquin, p. 15. また、ネーヴ侯爵が収監されている監獄にルルーが潜入したエピソードについては、新聞連載版『ボヘミアンとルールタビーユ』*Rouletabille chez les Bohémiens* においても、ルールタビーユが行ったこととして置き換えられているが、書籍版では、ネーヴ侯爵の名は「T...侯爵」に変更されている。Voir 25.10.1922, p. 2 ; Gaston Leroux, *Rouletabille chez les Bohémiens*, dans *Les Aventures extraordinaires de Rouletabille reporter*, tome 2, édition établie par Francis Lacassin, Laffont : Bouquin, p. 321.

と散歩に出かけた侯爵が、少年を見失ってもすぐに探さず、警察にも届け出なかったという不可解な行動や、遺体の発見から9年を経てから侯爵夫人が夫を訴えた理由など、謎が多かった。かつ裁判は、次第に、侯爵の暴力的な言動やこの家の家庭教師だった神父の人柄とこの人物の事件への関与の有無が大きな議論の的となり、肝心なイポリット少年の殺害については、証拠も動機も不十分のため、侯爵は、無罪判決を勝ち取る結果となった。

この事件が、長らくルルーの脳裏から離れず、さまざまな疑惑が払拭できなかったことは、この事件を思い出しながら、イポリット少年が歩いた道を辿ったことを綴った「散歩」Promenade(21.3.1902)と題された記事に認められる。そして、アルフュの指摘を信じるなら¹⁶、ルルーは、この事件を通して、被告の運命を決定する陪審員の投票がくじ引きのような結果を生みかねない裁判制度の弱点に注目することになる。そして、裁判の傍聴を通して司法の在り方をも問い質すことは、ドレフュス事件の傍聴においても引き継がれることになる。

IV. 真実と正義

ネーヴ侯爵事件と異なり、ルルーは取材当初からドレフュス無罪を確信していたようだが、その要因とこの事件の裁判傍聴記の検証に入る前に、まずは、ルルーが担当したドレフュス事件関連記事の時期を確認しておく。

ドレフュス事件について、ルルーが最初に報じたのは、この事件が公になってから4年後に、ドレフュス有罪の決め手となった明細書の筆跡を根拠に、アルフレッド・ドレフュスの兄マチューが、エステラジーに対して起こした裁判からである。以後、ルルーは、以下の時期の前後に、この事件の関連記事を数多く発表している。

- 1898年 エステラジー裁判 (1月)
- ゾラ裁判 (2月・7月)
- ドレフュス裁判の再審請求 (10月)
- 1899年 レンヌでのドレフュス裁判再審 (8月)
- 1906年 レンヌ軍法会議の判決破棄、ドレフュス無罪、軍籍復帰

この事件に関する一連の記事において、まず注目しておきたいのが、法曹関係者の

¹⁶ Voir 8.11.1895. 無署名のこの記事をアルフュは、ルルーによるものとしている。
Cf. Alfu, *op. cit.*, p. 14.

描写である。例えば、ピカール大佐の弁護人であったルブロワ弁護士は、次のように描かれる。

Il a donné hier à la cour d'assises des explications aussi nettes et aussi complètes que possible. M^e Leblois parle froidement et méthodiquement, en avocat d'affaires qui sait la valeur des mots, qui s'emballé rarement et qui ne se charge d'une cause qu'après y avoir mûrement réfléchi. (2.9.1898, p. 1)

ここでルブロワ弁護士は、熟考した上でなければ仕事を引き受けないという慎重な姿勢や、感情的にならず、冷静で体系立てて話す人物として描かれている。また、破毀院判事のバールは以下のように紹介される。

La sortie s'est effectuée sans tumulte, dans une sorte de recueillement, dans la discussion relativement paisible du rapport de M. le conseiller Bard, dans lequel on se plaît généralement à reconnaître une grande sincérité, une entière bonne foi en même temps qu'une logique des plus serrées. (28.10.1898, p. 2)

上述のルブロワ弁護士にも通じる、緻密に論を立てる資質に注目するだけでなく、「非常に誠実で、全く善意の人」という人柄も、同意語を重ねて強調されている。

さらに、必ずしもドレフュスに好意的とは言い切れない法曹人についても、その姿勢が評価される。それが、ヴァン・カッセル検事総長¹⁷である。

Il ne recherche point les effets d'audience et ne frappe point les esprits, mais son argumentation est ordinairement bien déduite et suffisamment serrée. (22.02.1898, p. 1)

やはりここでも、奇を衒わない語り口や、十分に考え抜かれた緻密な論証に注目させている。

¹⁷ ジョゼフ・レナックは『ドレフュス事件史』の中で、検事総長ヴァン・カッセルを無愛想で乱暴な人物と紹介した。かつ、ゾラ裁判中にルルーが指摘した「聴衆のうけを狙ったり、目立とうとしない」スタイルを、一種無気力で退屈なスタイルと評している。ヴァン・カッセルは、ゾラの行為を終始物憂げな様子で非難しながらも、同じ調子で、筆跡鑑定家の判断を退けた。しかし、後に偽書と判明するアンリ少佐が偽造した証拠を信憑性があるとするなど曖昧な態度を取った。Cf. Joseph Reinach, *op. cit.*, pp. 901, 972-977.

このような法曹人の描写から、ルルーがドレフュス派に好意的だった理由の一端が見いだされるように思われる。これらの記事に描かれた法曹人にも似た資質が、ドレフュス派の人々にも見出されるからである。それはまず、エステラジー裁判において、ドレフュス大尉の兄マチューの奔走を述べるくだりに現れる。

Pour parfaire ses informations, M. Dreyfus s'enquit de la vie privée de celui qu'il considérait déjà comme coupable, et, sur ce point, tous les renseignements qu'il recueillit furent absolument défavorables. Le comte Esterhazy était représenté comme faisant des dépenses excessives, menant une vie dissipée, entretenant une maîtresse, étant toujours à court d'argent et se servant des moyens les plus répréhensibles pour s'en procurer ; ces faits constituaient autant de charges morales de nature à le fortifier dans ses croyances.

Enfin, comme le bordereau produit au procès de son frère annonçait l'envoi d'un certain nombre de documents et que l'on avait argué de leur caractère confidentiel pour en déduire qu'un officier attaché à l'état-major de l'armée pouvait seul se les procurer, M. Mathieu Dreyfus dirigea ses efforts de ce côté et s'employa à résoudre le problème de savoir si un officier de troupes avait pu également les avoir en sa possession.

Le résultat de ses recherches ne lui aurait laissé aucun doute à cet égard.

C'est armé de tous ces renseignements qu'il se décida à accuser publiquement le commandant Esterhazy en se basant surtout sur l'identité de son écriture avec celle du bordereau. (11.1.1898, p. 1)

エステラジーが乱れた私生活を送り、金銭的に窮していたという状況証拠に加え、この人物を有罪と判断するためのあらゆる資料を入手し、入念に論証を重ねて裁判に臨むマチュー・ドレフュスの肖像に、前述の記事で描かれた法曹人たちの資質が見いだされるだろう。

信頼できる証拠をもとに論証を重ねる手続きをルルーが評価することは、そのような手続きがなされない際の怒りや苛立ちからも認めることができよう。例えば、エステラジーの判決を報じた以下の記事が挙げられる。

C'est fini. L'acquiescement a été prononcé. Après les dépositions de MM. Scheurer-Kestner et Mathieu Dreyfus que l'on attendait avec une certaine impatience, car on estimait qu'il devait en sortir quelque chose de nouveau, qui eût au moins expliqué la

campagne d'hier, quelque chose de nouveau qui n'est pas venu, après ces dépositions, nul ne doutait de l'acquittement à l'unanimité. (12.1.1898, p. 1)

「終わりだ」という書き出しや「少なくとも昨日のキャンペーンに説明がつくような、何か新しいことが出てくるはずだと見ていたのに、何か新しいことはでてこなかった。あのような供述書が提出された後は、全員一致の無罪を誰も疑っていないのに」といったくだりに、正当な手続きによって出された申し立てが認められないことへの腹立たしげな調子が伺えよう。

同様の苛立ちや非難は、ゾラ裁判において、ゾラを擁護する弁護士や証人の証言を妨害する言動への言及にも認められる。

C'est là un spectacle sans pareil, mais que dans notre impartialité, nous jugerions lamentable si cette cause à jamais célèbre, n'avait été engagée, selon la parole de M. Zola, au nom de l'humanité, de la vérité et de la justice. (9.2.1898, p. 1)

「真実と正義」は、ゾラが一連のドレフュス擁護論の中で繰り返した言葉であるが、それは裁判の原則でもある。ここにも、弁護士であったルルーがドレフュス派に好意的であった一つの理由を見出せるだろう。

V. 司法の危機

ところで、エステラジー裁判からドレフュス再審までの、ルルーのドレフュス事件裁判傍聴記事を概観すると、最後に傍聴したレンヌ軍法会議の傍聴記事の論調の変化は明らかである。エステラジー裁判やゾラ裁判においても、自身のドレフュス派寄りの見解は、とりわけ裁判記録中で彼らに有利な個所を多く引用することで表され、直接的に表明する場合でも先に引用した記事にあるような、控えめなものにすぎなかったが、それは、ゾラ裁判後からますます鮮明になる。例えば、デュ・パティ・ド・クラム中佐が、ジュール・オフレ弁護士に送ろうとした手紙が発端となったインシデント¹⁸への言及が挙げられよう。ルルーは「弁護士会」L'Ordre という記事において、こ

¹⁸ このインシデントは、デュ・パティ・ド・クラム中佐が、法廷に多くの士官を送り込んで弁護士や陪審員を応援することを約束した手紙を弁護士ジュール・オフレに送ろうとしたが、ファースト・ネームを誤ったために、フランソワ・オフレ弁護士に届いてしまい、自分に宛てられたものではないことと尋常でない内容のために、フランソワ・オフレが、バルブーと相談し、法務大臣にその手紙を提出したこと。 Voir *Ibid.*

のインシデントに言及しているが¹⁹、バルブー弁護士は、ドレフュス事件から派生した裁判の一つで、ジョゼフ・レナックがアンリ・ロシュフォールに対して起こした裁判²⁰において、レナックの弁護を引き受けていたために、この一件で、バルブーとフランソワ・オフレ両弁護士は、軍寄りの愛国者たちから手紙泥棒呼ばわりされた。とはいえ、この2人の弁護士の行動は、武装した士官たちの存在によって裁判が正常に行われないことを危惧したものであるゆえ、ルルーもバルブー弁護士の行動や動揺に理解を示している。

Que M^e Barbou ait éprouvé quelque émotion en apprenant que M. du Paty de Clam avait de nombreux amis à glisser dans l'audience, cette émotion peut être jugée naturelle, mais la nouvelle lui en est arrivée dans des conditions spéciales que chacun sait. (3.3. 1898, p. 1)

ルルーは、バルブー弁護士を、評議会の「小煩い取り締まり気質」 *esprit de police tracassière* の犠牲者と評し、同情しているが、同弁護士は、5月3日に評議会が無罪を言い渡す前に辞職している²¹。

このインシデントは、弁護士たちの軍への「親近感、信頼そして敬意」 *leurs sympathies, leur confiance et leur respect* の表明に対する評議会の無関心をいくぶん戯画的に描いた一節と、妻を他の弁護士に誘惑されたために起こった弁護士間の争いを調停する評議会に対する揶揄の間に挿入されているゆえ、弁護士会と彼らの上位に位置する評議会との不和を茶化すようなエピソードの一つとして紹介されているものの、司法の自立

p. 970.

¹⁹ Voir 3.3.1898, p. 1. さらに、この記事において、バルブー弁護士の一件と並べて、ドレフュス家のために軍法会議に出廷したラボリ弁護士に、その場で自分の資料を見せたルブロワ弁護士に対しても評議会が何らかの制裁を加えようとした一件が挙げられているが、ルブロワ弁護士の行為は、職務上説明がつくものとして問題視はされないだろうとルルーは判断している。

²⁰ 1993年にエステラジーがピカール大佐の友人とともにブリュッセルにいたことを証明するオットーと称する謎のドイツ外交官の手紙で、ゾラ裁判中、ルメルシエ＝ピカールがその存在を吹聴していたものだが、のちに偽書であると判明する「オットー偽書」について、ロシュフォールがその作者をレナックだと名指ししたことから、レナックが名誉毀損罪でロシュフォールを訴えた裁判。 Cf. Jean-Jacques Tur, « Le “faux Otto” », *L’Affaire Zola-Dreyfus Bibliographie - Chronologie- Dictionnaire*, L’Harmattan, p. 73.

²¹ Cf. Reinach, *op. cit.*, p. 970.

の危機の一端は示されていると言えよう。

さらに、レンヌ再審に関する記事においては、司法関係者の不公平な態度はより深刻な筆致で報告されることとなる。例えば、この再審の裁判長を務めたジュオ大佐は、以下のように描かれる。

Plus particulièrement, le colonel Jouaust, dont la haute impartialité avait été vantée, qui fut même désigné par quelques-uns comme favorable à la cause de la révision, étonna tout le monde par ses façons d'être et d'interroger. L'opinion qu'il exprima sur « les probabilités qui ne peuvent rien signifier par elles-mêmes étant isolées, mais qui, réunies, peuvent constituer une certitude », et la manière tout à fait sèche et bourrue dont il coupait la parole à Dreyfus : « Vous n'avez qu'à répondre, attendez que je vous interroge », tout cela, accompagné de froncements de sourcils terribles et de haussements d'épaule significatifs, ne disait rien de bon pour Dreyfus. (12.8.1899, p. 1)

この時のジュオ大佐の態度は、見かけだけで、実際はドレフュスを無罪と判断していると見抜いた者たちはいたが、マチュー・ドレフュスは、大佐が弟を有罪だと判断しているのではと危惧したようだ²²。この一節からは、ルルーも、マチュー・ドレフュスに近い印象を抱いていたことが窺えるが、ジュオ大佐が公平な人物として知られていただけに、その驚きの大きさも読み取れよう。

このように、裁判を司る者に対する圧力や、裁判を司るものの不公平な態度に対する批判は明らかだが、この再審中、ゾラとドレフュスの弁護士ラボリが銃撃されると、もはや客観的な立場ではなく、個人的な感情から非難することになる。

J'assiste à ceci, le front découvert, et mon émotion est sans bornes, mes larmes coulent, car cet homme, que ses ennemis mêmes devraient admirer pour la puissance souveraine de sa conviction, la haute envolée de son éloquence et a beauté de son âme, je suis son ami.

[...]

Va-t-il finir ici? La Providence ne jugera-t-elle pas qu'il est imprudent, pour l'ordre des choses éternelles, d'enlever un tel homme à une telle tâche avant qu'il l'ait terminée?

²² Joseph Reinach, *Histoire de l'Affaire Dreyfus*, (1903-1920), Laffont : Bouquin, 2006, tome II, p. 503. ジュオ大佐は、再審においてドレフュス無罪と判断した二人の判事のうちの一人だった。Cf. Jean-Jacques Tur, « Colonel Albert Jouaust », *op. cit.*, p. 38.

Cette tâche, qu'il a l'orgueil d'avoir crue de justice, avant beaucoup d'autres, et qui, peut-être, dans quelques jours, quand le conseil de guerre nous aura dit ce qu'il en pense, sera devenue pour tous une œuvre de gloire, cette tâche, il lui a tout donné. Il lui avait donné sa situation au Palais, il lui a sacrifié sa situation politique, et tous ses intérêts privés ou publics, et son repos, et sa santé déjà ; oui, il avait donné tout cela à ce qu'il estimait être la vérité. Mais ce n'était pas encore assez et voilà maintenant que la vérité va être faite de son sang. (15.8.1899, p. 1)

「私の友人なのだ」という個人的な関係を持ちだし、涙する自分の姿も描き出すほど主観が前面に押し出されているが、この弁護士がすべてを犠牲にして職務を全うする姿勢を強調しながら、「それでもまだ十分ではないのだ、それで、いまや真実は血で実現されようとしているのだ」と、暴力によって裁判が左右される事態を激しく非難している。ところで、このような記事の傾向が続くことを、『マタン』紙は容認しなかったようだ。ルルーの記事は、この8日後の8月23日で終わっている。アルフュはその理由を、編集部による処分としているが²³、それは、再審判決の出る1日前の9月8日、「釣れない Ça ne mord pas」という1面に掲載されたエッセイからも窺える。

Alors, on m'a dit : « Vous prendrez un long bâton flexible, au bout duquel un fil pendra, et vous essaierez d'oublier l'affaire Dreyfus. » Je m'en fus donc à la pêche. (8.9.1899, p. 1)

「ドレフュス事件を忘れるようにしなさい」と言った人物は名指されていないものの、この裁判の担当から外されたことは仄めかされている。また、新聞や手紙が配達される朝11時の鐘を聞いて、『フィガロ』紙とレンヌ軍法会議の速記録をすぐさま買い求め、相変わらず魚が食いつかない竿の傍らでそれを読み始め、「『ドレフュス事件を忘れ』るために出かけるのだが...釣れない!... je m'en vais « oublier l'Affaire Dreyfus »... Ça ne mord pas!...」という結語からは、事件に興味がなくなった訳ではないことも明らかだろう。その後、ルルーが『マタン』紙においてドレフュス事件を報じるのは、その7年後、ドレフュスによろやく無罪判決が下った時のことであった。

Dernière séance, dernier écho d'une affaire encore retentissante, dernières injures et

²³ Voir Alfu, *op. cit.*, pp.42-43.

derniers coups, première victoire de ceux qui travaillèrent pour la justice et pour la vérité. (14.07, 1906, p. 1)

審議も、その反響も、罵声も暴力もみなこれが最後(dernier)であり、「正義と真実のために働いた者たちの最初の勝利」が始まったと反ドレフュス派、ドレフュス派の両陣営を対照的に描き、これに続く裁判の様子は、当初のような裁判記録を多用するスタイルに戻って、淡々と綴られている。ルルーの喜びが具体的に認められるのは、この冒頭部分だけであるが、このジャーナリストのドレフュス事件関連の裁判傍聴記をすべて通してみると、この一種平坦なスタイルに、危機感の払拭も読み取れるのではないだろうか。

おわりに

「ルルーは優れたドレフュス派にはならない *Leroux ne sera pas un brillant dreyfusard*²⁴」とアルフュが評したように、ルルーのドレフュス擁護は、『マタン』紙が許す範囲のものでしかなく、この新聞社から離れて、ドレフュス擁護の運動に身を投じることはなかった。しかし、一貫して、ルルーはドレフュス無罪を信じ、ドレフュス派に好意的だった。それは、ドレフュスの冤罪を晴らすための運動の、事実に基づき論理的な推論を重ねる手続きに、弁護士的理想像に近いものを認めた親近感もあろうが、事件の真相を解明するための正当な手続きに対して加えられた数々の妨害行為を前に、司法の自立に対する危機感を強めたことも大きく影響しているのではないだろうか。ネーヴ侯爵事件において陪審員の投票の恣意性という裁判制度そのものの脆弱性を認めた後であっただけに、司法とその制度の危機は一層強く意識されたのかもしれない。

ルルーは、その後、裁判制度の不備や無実の証明の難しさを、戯曲『判事たちの家』*Maison des juges* (1907)において描き、無実の罪も、小説『シェリ＝ビビ』*Chéri-Bibi*、とりわけその第2のシリーズ（『シェリ＝ビビの新たな冒険』*Nouvelles aventures de Chéri-Bibi*）の題材の一つとしている。これらの作品を詳細に検証することで、ルルーの司法に対する考え方はより鮮明になると思われるが、それは、別の機会に譲りたい。

²⁴ Alfu, *op. cit.*, p. 42

Gaston Leroux et l’Affaire Dreyfus

Ses articles dans *Le Matin*

Akiko Miyagawa

Gaston Leroux croit en l’innocence d’Alfred Dreyfus et écrit, à partir du procès d’Esterhazy des articles favorables aux dreyfusards. Sa position semble à première vue surprenante si l’on considère les positions anti-dreyfusardes du *Matin*, pour lequel il travaille comme journaliste. Ce journal, fondé en 1884 par l’Américain Sam Chamberlain, propose au début des informations courtes recueillies par « les fils spéciaux ». Mais les successeurs de Chamberlain, Henri Poidatz et Maurice Bunau-Varilla, changent d’orientation, n’hésitant pas à publier des articles provocants et à lancer des campagnes tapageuses, qui font de journal un des plus grands quotidiens de la Belle Époque. Politiquement, le journal affiche une certaine neutralité en publiant des articles de journalistes de toutes tendances. La présence d’un journaliste comme Leroux est précieuse pour attester cette « neutralité ».

De plus, sa façon d’écrire les chroniques judiciaires peut être qualifiée de « neutre ». Ses articles sur un procès d’anarchistes en 1894 illustrent une de ses caractéristiques : il critique le manque de correction de l’accusé, tout en reprenant le plaidoyer de l’avocat, qui le défend et le présente comme une « victime de la société ». Ce style peut sembler équivoque, mais il convient à un journal comme *Le Matin*.

Une autre caractéristique apparaît dans les articles de Leroux sur l’Affaire du Marquis de Nayve, dont le procès est entrepris en 1895, neuf ans après la découverte de la victime - le jeune Hippolyte Ménaldo. En suivant le procès de cette affaire mystérieuse, le journaliste pointe les manquements d’une justice qui détermine le sort de l’accusé à la manière d’une loterie.

Il constate une autre faiblesse de la justice au moment de l’Affaire Dreyfus. Ancien avocat, il apprécie la solide argumentation des dreyfusards et la sincérité qu’il voit en eux, mais il les voit entravés par le camp anti-dreyfusard. Cela explique sa sympathie pour les dreyfusards mais aussi son indignation face à la pression exercée par les auditeurs et à la violence subie par l’avocat dreyfusard, qui menacent l’impartialité de la justice. Sa prise de position dreyfusarde est motivée par la crainte d’une erreur judiciaire autant que par celle d’une crise judiciaire.